

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	畏友 星野一郎さんを偲ぶ
Author(s)	鈴木, 智弘
Citation	広島大学マネジメント研究 , 21 : 4 - 7
Issue Date	2020-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048987
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



畏友 星野一郎さんを偲ぶ

信州大学経営大学院 鈴木 智 弘

星野一郎さんが9月14日に急逝されてから、畏友を失った寂しさと喪失感は、日々募るばかりです。

自分が、星野さんの追悼文を執筆しなければならないとは、全く想像しておりませんでした。

星野さんは、公私ともに「星野イズム」というべき拘りをもった人でした。内田百閒をこよなく愛したというのも、星野イズムの形成に繋がっていたのではないのでしょうか。私は、経営学研究者であるため、会計学者としての星野さんの業績について、評価できる立場ではありませんので、私の知る人間「星野一郎」さんについて、語ることと致します。

星野さんを知る人は、誰もがご承知のことでしょうが、星野さんは誰にも対しても「さん付け」でした。相手が、学長であろうが、中央官庁の事務次官であろうが、ご本人の前でも、ご本人不在の場面でも、変わらず「さん付け」でした。

星野さんの著書巻末の謝辞も同じスタンスでした。1998年、1999年までは、恩師や他大学の教員には「先生」と記載しておりましたが、2001年以降の著書では、「先生」という呼称はなくなり、全員「氏」となりました。星野さんの師匠、会計学の泰斗である飯野利夫先生に対しても同じでした。この変化について、ご本人に理由を尋ねたことはありませんが、1998年に博士号を取得し、2000年から教授として故郷広島に戻って、心境が変化されたのではと邪推しておりました。後述致しますが、星野さんは、ライフスタイルを激変させることがありました。しかし、星野さんの「洒脱さ」と、フェアネスさは、変わることはありませんでした。

私とのメールでのやりとりは、平仮名で「さま」でした。本追悼文では、星野一郎「先生」ではなく、星野さんの流儀にならって「星野さん」と呼ばせて頂きます。私が、メールなどで「星野先生」と記載すると、必ず「何か魂胆があって、先生と記載しているのだろう」という返信や電話が即座に送られてきました。

私は、会計学者としての星野さんの業績を評価できる立場ではありませんが、星野さんは財務会計の視点で、私は戦略論、組織論の視点で金融機関を研究対象としていたため、星野さんの4冊の著書や、星野さんとの議論は、私の研究上、血肉となりました。また、星野さんは、言葉に大変拘りのある人で、助詞や送り仮名の使い方まで徹底していました。研究者、特に人文社会科学の研究者にとって、ひとつの単語や助詞であっても、疎かにしないということを、星野さんから教えられました。おそらく、この追悼文は、星野さんに、真っ赤に校正されてしまうことでしょう。

さて、私と星野さんの出会いは、1996年10月に私が、信州大学経済学部経営学・会計学講座に赴任した時に遡ります。しかし、当時は、同講座の同僚教員という範囲を超える親密な付き合いはありませんでした。星野さんが、私のかげがえのない畏友となったのは、星野さんが2000年に広島大学社会科学部経営学・会計学専攻に異動されてからのことです。広島大学、信州大学と勤務校は違いましたが、大学法人の財務担当や、社会人大学院の教学責任者など、同じ職を務めることになり、大学運営、大学院運営などで、多くの共通の悩みを抱えるようになりました。その苦悩は、同じ立場でなければ、簡単に共有できるものではなく、職場で同僚に表明できるものではありませんでした。そのため、心に溜まったものがあふれ出そうになると、電話やメールなどで連絡を取り合っていました。しかし、職務上の守秘義務や個人情報開示の扱いについては、お互い臆病なほど慎重でしたので、会話の中に、職務上の秘密の吐露は、一切なかったと断言できます。職場での柵や悩みを離れて、研究のこと、プライベートのことを無邪気に語ることで、ストレスを解消してきました。職務上の問題については、具体的なことは話さなくても、星野さんと私の間では、その意は通じ、お互いに共鳴し合った関係が約20年近く続きました。

2019年になって、私が、消費者庁、環境省と連携して、新しい社会人教育を推進するための取り組みを開始した際、真っ先に相談したのは、星野さんでした。撤退戦の連続という性格の大学院運営ではなく、新しい可能性にチャレンジできる取り組みと考えたのです。

2020年代は、IT、AIの発達、シェアリングエコノミーの進展により、事業者と消費者の関係が大きく変化すると予想されます¹。取引範囲は、世界中に広がることになり、取引、つまり国境を越えた市場のルールの確立、即ち「規範的市場メカニズム」が必要になります。規範的市場メカニズムには、法規制であるハードローと、企業や団体が、自主的にルールを作って、それに従うことやISOなどの社会規範であるソフトロー、補助金や税などの経済的インセンティブ、マーク・認証表示などの市場への情報提供があります。

これまでの消費者行政、環境行政は、規制行政の性格が強く、ともすれば、ビジネスの制約要件でした。消費者行政も環境行政も事業者と消費者、一般国民との間に情報の非対称性や交渉力、対応力の格差があるため、消費者や一般国民を一方的に弱者として保護対象とし、企業に様々な規制を課してきました。このハードローとしての規制は、経営資源に余裕のある大企業は対応できても、経営資源に乏しい中小零細企業の経営を苦しめることもあります。また、経済活動を行政が事前規制することは、イノベーションを阻害するものです。加えて、あらゆる活動を規制することは不可能であると共に、行政コストを増大させます。

更に、2015年9月の国連サミットで採択されたSDGs（Sustainable Development Goals）への対応が、わが国でも本格化しています。SDGsが掲げる17の目標は、人道的な観点からも誰も否定できないものですが、誰が目標達成の費用を負担するのが問題となります。SDGsは、グローバル化する経済への対応として、地場中小零細企業にも要求されるものです。地場中小零細企業に対して、ハードローとして強要し、コスト増となり、経営を圧迫するのではなく、インセンティブとなって、自主的に対応できるようにしなければ、SDGsは画餅に終わるでしょう。即ち、消費者問題やSDGsなどに自主的に従うことで、企業は、顧客ニーズを把握できるようになり、顧客に支持される商品開発が可能となること、その結果、製品廃棄が減少するという収益力強化に繋がらなければなりません。収益性と持続可能性を両立させる経営が必要になります。

以上の問題解決のためには、新しい経営理論の構築が必要となります。更に、企業や行政において、新たな経営を担うための人材養成が必要になります。首都圏や関西圏などの大都市圏では、学びの機会が多く提供されていますが、非大都市圏では、学びの機会は限られています²。グローバル経済が進展する中で、非大都市圏で高度なビジネス人材養成を目指して開設されたのが、社会人ビジネススクールです。広島大学社会科学部研究科マネジメント専攻も、私の所属する信州大学大学院経済・社会政策科学研究科イノベーション・マネジメント専攻（通称：信州大学経営大学院）も、高度なビジネス人材養成を目指した独立大学院³です。社会人ビジネススクールの在校生、そして修了生は、地域経済や行政の中核人材です。この地域中核人材を活かして、SDGs、新しい消費者志向を実現する経営人材を養成したいと考えてきた私や仲間⁴の考えに消費者庁や環境省からの共感が得られ、この新しい経営を「サステナブル経営」⁵と称することになりました。サステナブル経営に基づく人材育成を地方大学⁶のビジネススクールを基盤とし

¹ 以下の記述は、拙稿（2019）「企業経営の観点での消費者政策研究の可能性」『消費者政策研究』Vol.01 日本消費者政策学会 14～18頁に詳しい。

² 同じレベルで論じるのは不適切かもしれないが、有名難関大学への合格率を首都圏などの大都市圏出身者と非大都市圏出身者を比べると前者が多いのは、大学受験を指導できる予備校、塾、家庭教師が大都市圏に集中していることが一因であろう。

³ 学部に基盤を置かない大学院を独立大学院（研究科あるいは専攻）という。また、社会人ビジネススクールには、学位論文を課さない専門職学位を授与する専門職大学院と、広島大学や信州大学のように学位論文を課す従来型の大学院が存在する。

⁴ 代表的な存在として樋口一清日本消費者政策学会会長（現在、昭和女子大学特命教授）を指摘する。

⁵ サステナブル経営という言葉は、2018年末当時の宮腰光寛内閣府特命担当大臣（消費者及び食品安全）の発案である。

⁶ 星野さんからは「地方大学」という言葉は、後進性を想起させるので、慎重に使わなければならないと注意された。

て、経済団体、行政機関、消費生活センターや環境事務所などと協力し、地域に広げてゆくプロジェクトが2018年秋から開始されました。

2019年正月明けから、この取り組みの具体化を開始し、畏友であり盟友である星野さんに相談しました。星野さんは、この考えに即時に賛同し、共に推進していくことを約束しました。そして、この取り組みは、運営資金に苦しむ地方国立大学文系の外部資金獲得という些末で狭隘な発想ではなく、新しい経営を体系化することを通じて世界に貢献するための活動に発展させることを目的とすることになりました。そのためには、新しい発想を持つ若手研究者に活躍する場を提供することが必要であり、文部科学省の動向を忖度し、目先のことに目を奪われ大局を見失っている大学法人の枠を超えたものにしようと誓いました。星野さんと私は、ドン・キホーテなのかもしれませんが、大きな志を持って、次世代を育成することが国立大学法人の定年退職が現実になった二人の最後の仕事ではないかと考えました。

しかし、理想が高ければ高いほど、現実には厳しいものです。サステナブル経営を推進するための地方大学ビジネススクール連合の立ち上げには、大変苦労しました。私が、霞ヶ関や各大学との交渉を担い、その後方支援を星野さんという役割分担で2019年3月から行動を開始しました。昨今の文教政策で痛めつけられている地方国立大学では、遠大な理想よりも今年度、来年度の予算獲得が優先されます。このことは、地場中小零細企業と共通します。従って、資金確保が見込めなければ、サステナブル経営人材養成に参加する大学はありません。活動資金をどのように確保するのかは、現在も悩まされています。星野さんも私も、経営系専門職大学院を持つ国立大学に対する勧誘⁷と同時に、自らの所属校の学内調整に忙殺されました。学内外の調整は、予想以上に難航し、途中、絶望感に打ちのめされた時もありました。その時は、「諦めたら、そこで終わり。最後まで諦めない。」と、星野さんとお互いを励まし合いながら、事を進めました。大学連合の名称も「サステナブル経営」を冠することに異論はありませんでしたが、教育を重視するのか、研究を重視するのか、星野さんと議論を重ねました。星野さんは、「あくまでも大学の行う教育なので、それは研究に裏打ちされていなければならない。それが、ふたりの当初構想のはずだ。」と強く主張され、「サステナブル経営研究推進機構」と名称を定めました。

多くの障害を乗り越え、2019年6月24日に、広島大学、信州大学、香川大学、長岡技術科学大学の4大学を発足メンバーとして「サステナブル経営研究推進機構⁸」として発足させることができました。発足式は、4大学の学長もしくは理事が出席し、井内正敏消費者庁次長、鎌形浩史環境省大臣官房長、小幡康弘文部科学省専門教育科長を来賓⁹として招き、東京霞ヶ関ビル内で開催されました。発足式では、星野さんが司会、私が主旨説明を行いました。

星野さんは、数年前から、スーツやネクタイを着用しないようになっていました。星野イズムのひとつなのでしょう。所属先の学位授与式などでも、そうだったようです。公式な場でも Burberry の BlackLabel のジーンズを愛用していたようで、発足式でも「環境省が協賛し、次官就任が決定している鎌形官房長も出席するので、クールビズで良いのだ。Burberry の BlackLabel の黒いジーンズは、当日には普通のスラックスに見える。」とノータイ、ジーンズで式に臨みました。発足式の数日前に、星野さんからジーンズ着用を知らされた際、これと決めたら、梃子でも動かない星野さんの性格を知っていましたので、「クールビズだから、ジーンズなんて中途半端でなく、海パンで出席したら。」と冗談を伝えました。遠目に見ても、ジーンズはジーンズですので、星野さんを知らない霞ヶ関や他大学の出席者には、驚いた人も居たようですが、私は、星野さんらしいと思っておりました。紆余曲折あった発足式を無事終わらせ、樋口運営委員会委員長を交えて、四ッ谷で安堵の祝杯を挙げました。

サステナブル経営研究推進機構の本格的活動は2020年度からですが、星野さんは、広島大学において

⁷ 霞ヶ関や経済界との関係で、早急に立ち上げる必要があることと、事業運営や財政問題が安定するまでは、ガバナンスの共通点が多い国立大学を発足メンバーとした方がよいと考えた。

⁸ 加盟大学の学長から構成される評議員会、加盟大学代表者及び有識者から構成される運営委員会、そして信州大学に事務局を置く組織として発足した。評議員会議長は、4大学の学長・理事の互選で濱田州博信州大学学長が就任し、実際の運営を担う運営委員会委員長に樋口一清教授、同副委員長に星野一郎さん、事務局長を私が務めるという態勢。

⁹ 来賓の肩書きは2019年6月24日時点。鎌形氏は、2019年7月から環境省事務次官。

も、マネジメント専攻の運營業務だけでなく、大学院改組など、多くの仕事を抱えており、そのため、著書出版が数年遅れていることを悩んでいました。7月末の電話で、「出版社から、最後通牒を受けそうなので、何とか仕上げなければならない」と星野さんから言われていたので、8月上旬に星野さんに「原稿執筆の邪魔にならないよう、9月末まで、電話もメールもしないから、執筆作業に専念して欲しい。」と電話したのが、星野さんとの最後の会話となってしまいました。

サステナブル経営研究推進機構の具体的な活動のための資金確保に取り組むために政府補助金を申請することになり、9月20日から再三、電話、メールで星野さんと連絡を取ろうとしました。9月末まで連絡しないと約束していましたが、10日位早く連絡してもよいだろうと思いました。しかし、星野さんから返信はありませんでした。これまでであれば、数時間以内に何らかの返信があったので、どうしたのだろうと思いました。星野さんに異変があったとは露程も考えておりませんでした。余りにも星野さんと連絡が付かないので、管理職である星野さんが数日も連絡を絶つことは不可能なので、マネジメント専攻事務部に連絡しました。そして、星野さんの急逝を知らされたのは、2019年9月25日のことでした。頭が真っ白になるというのは、このことでした。そして、涙が溢れ出しました。

2019年春から、星野さんから「疲れが取れない。」と聞かされていましたが、毎晩のように広島市の繁華街流川に飲みに行くなど、星野さんの日常生活を知っておりましたので「そろそろ、生活の改善を考えたら。」と伝えていましたが、急逝されるとは、全く考えておりませんでした。星野さんとは、お互いのドック検査数値も伝え合う関係で、私よりも遙かに健康で、私の方が、あの世には遙かに近いと思っていました。私は、2017年末に大病を煩い、現在も治療中ですが、私の病気を知らせた数少ない友人が星野さんでした。星野さんは、常に私の体調や、それに伴う精神状態を心配してくれました。星野さんが、多忙を極める身で、サステナブル経営研究推進機構の活動に参加してくれた一因には、私の体調を慮ってということがあったと思っています。

そのような畏友であった星野さんを失って、心に大きな穴が空いてしまいました。私の研究室には、ネット上で見つけた星野さんの2012年頃の写真を遺影として飾っています。大学院修了式の写真でしょうか、スーツにネクタイという「常識的」な服装で、ソファに掛けて、微笑んでいる写真です。

国立大学法人改革という名目で信州大学でも大学院改組が行われますが、その改組は、社会的使命を忘れた弥縫策です。サステナブル経営研究推進機構発足の際に考えたことと正反対ですが、星野さんの遺影を見つめ、「諦めたら、そこで終わり。最後まで諦めない。」という星野さんの言葉を思い出し、星野さんと語った理想に少しでも近づくよう歯を食いしばっています。

星野さんが2019年9月14日付けで従四位瑞宝小綬章を授与されたと伺いました。「どうせなら、従一位か文化勲章を受け取りたかった」と、星野さんは真顔で言うのではないかと思います。星野さんとの思い出は尽きません。これから、前向きな仕事に二人で臨もうと思っていた矢先で、最も大切な仲間を失ってしまいました。あの世の星野さんに恥じないような人生を歩むことで、星野さんに応えて行くことに致します。合掌。